

阪神・淡路大震災被災館の諸問題

— 神戸大学附属図書館の場合 —



神戸大学附属図書館情報管理課企画掛

1. はじめに

1923年、多くの大学図書館は関東大震災を経験している。その当時、図書館をとりまくきびしい環境の中で、どのような問題が正面から取り上げられたのだろうか。

1995年、大学図書館は70余年ぶりに、大地震に正面から向き合わねばならなくなった。最初の経験ではないが、近代的な図書館が確立して最初の経験ではないかと思う。それゆえに、地震が図書館に突きつける問題の全体の把握が、ぜひとも必要になるのではないかと思う。

2. 被災と復旧の概要

建物や設備の被害状況の詳細と復旧の経過については『神戸大学附属図書館報』Vol.4 臨時号で写真も含めて詳しく取り上げた。したがってここでは、それ以後に判明したことがらについて記述するに止める。

1) 被災市民と図書館

その1：市中に広大なキャンパスを持つ大学は、被災した市民の避難場所になる。附属図書館の職員は大学の構成員でもあり、図書館の復旧の前に被災者の救援という業務を担わねばならない。このことは図書館自体の復旧を遅らせることになるが、大学構成員として担わなければならない職務となる。このことは、学内のすべての部局教職員にとって共通のことがらである。なお、今回の震災で神戸大学に避難した市民は、ピーク時に約2,500名。9月末現在でなお15名である。

その2：大学内で被災をまぬがれ、また避難した市民を受け入れていない施設は、被災した市民、とりわけ被災した高校・大学の学生、受験生

の勉強の場所として施設を提供する必要があった。このことは、図書館の復旧を阻害する要因ではないが、緊急時に図書館等の施設が果たさねばならない役割となる。本学図書館では、二次災害の恐れのない閲覧室を3月末まで、一般の高校生・受験生・大学生等のための自習室として開放した。

その3：周知のように、市内の水道、ガス、電気等は壊滅状態になり、その回復のために全国から復旧要員が派遣された。そして大学はその作業基地として、さまざまな施設を提供した。今回の震災では図書館施設はその用に供されなかったが、構内の立地条件により、あるいはより状況のきびしい災害の場合、今回市内の多くの小中高の学校がそうであったように、図書館もまたその施設を提供する必要がある。

これらのことについては、県や市町村の職員でもある公共図書館の図書館員にとって、よりきびしい状況に直面されていることと思う。

2) 被災者としての職員

交通手段が壊滅し、電気・水道・ガスが壊滅した状態のなかで、程度の差はあるが図書館職員の全員が被災者となった。そして被災者は、自らの生活を再建していくために努力しなければならない。そしてそのために、図書館職員の福利厚生や権利保全に関わる庶務や会計関係の、この上なく困難かつ繁雑な業務が、種類においても数量においても膨大なものとなる。これらの処理も図書館職員が担当することになる。ちなみに本学図書館では、職員全体の20%が家屋の全壊または半壊、また神戸、芦屋、西宮、伊丹の各市内に住む職員のほぼ全員が家屋の一部損壊、電気・水道・ガスのほぼ完全な回復が4月、また交通手段のほ

ば完全な回復が8月であった。そしてひとまず安心できる生活の再建は、まだこれからである。

3) 図書館の復旧

建物のひび割れの補修は、9月までにはほぼ完了した。また仮立てしていた書架の取り換え、その他の設備の修繕・取り換えは、順次行っており現在も進行中である。この作業は、予算の限度もあり一部次年度に繰り越す部分がある。書架については、どのような耐震措置をほどこせばよいか決定的な解決策がないまま、とりあえず従来から引き継ぐ耐震措置をほどこしているだけである。これからの研究が待たれるところである。

図書館資料の被害は、本学の場合は比較的軽微であることが判明している。欠損した資料数は図書約1,000点未満である。

3. 震災後の展開

1) 図書館の在り方

このたびの震災を経験して、どのような図書館が地震に対して安全なのかを考えてみる必要がある。役立つ条件は次のようなことがらである。

1. 書架や家具、製本雑誌などは凶器になりうる。
2. 建物本体と関係づけられた積層式書庫は、建物が破壊されない限り壊れない。
3. 家具が机と椅子だけの閲覧室は、建物が完全に倒壊しない限り安全である。
4. 緩衝装置付きの機器あるいは家具は、地震の力をうまく中和している。
5. 動力系では、遮断と回復が最も早くなるのは電力（電気）である。

これらの条件を満足させる現実の図書館を思い浮かべてみると、よく整頓され電算化された完全閉架式の図書館ということになる。さらに突き詰めると、書庫を完全自動化した閉架式の図書館ということになるのか。

さて、安全であっても非機能的な図書館では役に立たない。また機能的であっても危険な図書館では今回の教訓が生かされない。われわれにとって重要な命題は、機能と安全をどのように調和させるかということである。そしてこのために、震災に関するさまざまな研究の成果が生かされていくべきである。そうであればこそ、この命題を追求していくための材料を提供することが、震災を経験した多くの図書館の重要な役割となる。

2) 震災文庫

大地震に伴う災害は、かなり広範囲かつ複合的なものになる。したがってこれに対する対策を十分に図るためには、かなり広い範囲の学問分野の研究を待たねばならない。このようなことから神戸大学では特定研究計画をたて、学問のほぼすべての分野にわたる研究課題に全学をあげて取り組んでいるところである。そしてこのような研究の基礎となり重要な手がかりとなるものに、地震発生直後から時間経過の各段階で生み出され、さまざまな媒体に乗せられて配布された情報がある。本学図書館では、震災後に配布され、撮影され、記録され、サマライズされた情報を網羅的に収集し、研究に提供するべく資料収集に精力的に取り組んできた。これらの資料のなかには、地方自治体の広報や、ボランティア団体の活動記録、被災状況の写真など、さまざまな形態のものが含まれている。これらの資料は「震災文庫」として図書館のなかにコーナーを設け、10月下旬をめどに、研究者だけではなく広く一般に開放し利用に供する予定である。また現在収集資料の速報目録は、インターネットを通じて閲覧できるので、ぜひともご利用いただきたい。

4. 結論

地震に備えるためには、多くの困難な問題の解明を含んでいる。まず規模の想定が難しい。こんなに大規模な大地の振動を、多くの人は予想し得なかった。そのため、書架やキャビネットの耐震の工夫は、ことごとく否定されてしまった。地震の振動を相殺する機構が必要なのだが、従来の書架やキャビネットは、「重量」と「固定」というそれを否定する概念によって安定する、という面が強調されている。

いずれにしても、地震に対する図書館の対応はこれから研究されねばならないし、その研究のためには、より幅広い学問的な成果を待たねばならない。強く望むことは、今回の震災を契機として図書館学のなかに、災害に対応できる幅広い学問的根拠を築いていただきたい、ということだ。

[NDC:012.29 BSH:1.大学図書館 2.阪神・淡路大震災]